

目を浴びている。中国の国際化も課題になりつつある。国際化とは、二つの面を含む。一つは中国社会の成立は国際社会学の不可欠な一部分となり、国際社会学界と対話する能力と地位を持ち、国際社会学界に認められるような社会学になること。もう一つは、中国の社会学者はグローバルな視点と、人類の実践の高度に立って、中国社会を解釈し、そして中国の社会学理論を再構築する。二つの面は相互依存の関係である。後者は前者の内在本質であり、前者は後者の表現形式である。21世紀、中国社会学の本土化と国際化は同時に加速され、これも世界の一体化の趨勢および中国と世界一体化の加速との必然的な結果であると思う。

資本主義が植民地拡張をやって以来、世界はますます一つの経済システムに取り込まれつつある。しかし、現在、情報技術、電子技術と急速な交通手段の発達によって、世界は経済面だけに限らず、全体の社会文化生活ないし心理上面において日増しに緊密になりつつある。科学技術の日進月歩の発展は世界一体化の過程は前世未聞のスピードで加速している。世界の一体化はどのような国と地区の発展にとっても世界的な意味をもたらす。どのような国と地区の研究にとっても世界的な意味をもたらす。研究法においては、どんな国と地区での研究は世界全体に対する研究から離れられない。同じく世界に対する研究は具体的な国と地区に対する研究から離れられない。同時に、世界一体化はグローバル的な問題ももたらした（たとえば環境問題、東西問題、南北問題等々）。これらの問題の解決には直接的な国際協力が必要である。

中国を例にとっていえば、改革開放以前の一体化は局部的な、緩やかなものに過ぎない。改革開放以降、中国と世界の一体化が加速された。その程度の深さ（物質面から社会心理面まで）、範囲の広さ（都市から農村まで、東部から西部まで）、速度の速さは皆前代未聞なことである。特に中国では社会主義市場経済を実行して以来、経済において国際との連携を強化してきた。中国と世界の一体化の加速によって、中国は世界の政治、経済、

文化生活の欠くことのできない一部分となり、中国は世界にとって重要な意味をもつようになった。中国の成功は世界史にとって大きな貢献を与えることを意味する。したがって、中国を研究すること自身が国際的な意味をもっている。国際社会学界における中国研究はこの点を力説している。

社会学の本土化と国際化は異なるが、緊密に連結している二つの過程である。両者の関係を善処すべきである。どのような統一にしても、多様な統一である。社会学の本土化は国際化を排除しないが、社会学の国際化は本土化も排除しない。われわれの社会学は本当の本土化を実現してから、はじめて本当の国際化が可能になる。中国社会学が西洋社会学理論のまねばかりしていたのでは、自分の理論を構築することと、描写、解釈、予測、中国の社会学を指導することができなければ、そのような社会学は世界にとって、中国にとって無意味なものであり、本当の国際化もあり得ない。

世紀の移り変わり目に、特に21世紀に入って、中国と世界との連結はますます緊密化になるだろう。中国社会学の国際化のプロセスも加速される。中国社会学と西洋社会学、日本社会学との連結もますます緊密化になるだろう。同時に、本土化のプロセスももっと目立つようになり、加速されるだろう。中国社会学の国際化と本土化の加速によって、中国の社会学者は時代の歩みに寄せ、中国の社会学に対してさまざまな貢献を出さなければならない。

第三、中国社会学の総合化趨勢

世界の一つの潮流として、社会学学科の総合的な趨勢はますます顕著になってきた。国際化と本土化をしつつある中国の社会学に影響を与えざる得なくなる。

社会学学科の総合的な趨勢は主に三つの面に現れている。一つは社会学がその他の学科理論、方法と成果に対する吸収と応用である。それによって絶えず分科社会学が誕生する。西洋社会学の中の「新制度学派」はその一例である。次は、内部の各理論流派の融合である。ハーバーマスのコミュニケーション的行為の理論¹⁷⁾、アレクサン

17) 訳者注：Jurgen Habermas 著／河上倫逸他訳『コミュニケーション的行為の理論』上・中・下 未来社1985